



20年目のきょうも、
人と地球にやさしいアクション!

●発行: グリーンコープ共同体育理事会 ●編集: 共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

共生の時代



灌漑用水路建設現場での昼食のようす
左端が伊藤和也さん、右から4人目が中村哲医師

アフガニスタンの人々への支援を続けてきた
ペシャワール会・伊藤和也さんの死を悼み、その悲劇を
繰り返さないために、グリーンコープはこれからも
ペシャワール会に連帯していきます

アフガニスタンが俄かに世界の関心の中心になったのは、今から7年前のことです。「9・11同時多発テロ」後のアメリカによる空爆、そして未曾有の大干ばつによる飢饉。ソ連による侵攻以後、忘れ去られてしまっていた国・アフガニスタンに世界の目が注がれました。そのような中であって、半世紀にわたり、アフガニスタンを支援し続けているのが福岡市に拠点を置く「ペシャワール会」です。今年8月26日、大きな悲しみがペシャワール会を襲いました。現地ワーカーの伊藤和也さんが殺害され非業の死を遂げたのです。日本のマスコミ等の情報は錯綜し、真実が見えないままでした。これまでペシャワール会の活動に連帯・支援し、集会やカンパ活動などを続けてきたグリーンコープは、伊藤さんの死に関する真実や現地のような状況を分かり次第、組合員に情報を届ける、としていました。この度、ペシャワール会から会報号外が届けられました。その中から、ペシャワール会現地代表の中村哲医師の弔辞を紹介します。

弔辞

まず、ダラエヌール、シェイワ、シギの全ての人々が伊藤さんの捜索活動や遺体搬送に協力し、そして今日、こうして多くの方々が哀悼の意を表して下さることに、心からの感謝を申し上げます。

伊藤さんの遺徳については、多くの方々が様々な生前のことを述べられたので、私がくどくどと申すことは無用かと存じます。ダラエヌールの小さな子どもやご婦人方に至るまで、悲しみを表し、私たちはPMSへの同情と感謝を改めていただいたことは、悲しみの中にあっても、光栄という他、ありません。

伊藤くんを殺したのはアフガン人ではありません。人間ではありません。今やアフガニスタンを蝕む暴力であり、政治的なものであれ、物取り強盗であれ、心ない暴力によって彼は殺されました。

不幸にして世の中には、伊藤くんの死を政治目的に利用しようとする者もいます。また、アフガニスタンという国の文化を知らず、PMSと皆さんとの交遊を知らず、様々な噂や論評が横行いたします。その中には聞くに堪えない無理解、戦争肯定が少なからずあります。そうして生まれる武力干渉が、現在のアフガニスタンの混乱を招いてきました。このことを否定する者は、今日集まられた方々の中には居ないと思いません。私たちはもう、戦争に疲れました。

私たちPMSは、極力アフガンの文化を尊重し、アフガン人がアフガンのふるさとで、アフガンのやり方で生活ができるように、平和なやり方で、事業を進めてきました。繰り返しますが、「平和に」です。戦争と暴力主義は、無知と臆病から生まれ、解決にはなりません。

いったい、イスラム教徒であることが罪悪でしょうか。アフガン人が自らの掟に従って生きることが悪いことでしょうか。私はキリスト教徒であります。しかし、だからとて、ただの一度としてアフガン人から偏

見を持たれたことはありません。良い事は誰にとっても良い事で、悪い事は誰にとっても悪い事であります。現に、このようにして全てのクズクナルの人々が集い、異教徒である伊藤くんの死を悼んでいるではありませんか。心ない者はどこにも居ます。今回の事件でアフガン人と日本人との間に亀裂があつてはなりません。

アフガン人も日本人も、親として、人としての悲しみに、国境はありません。命の尊さに国境はありません。「困ったときの友こそ、真の友だ」といいます。今アフガニスタンは史上最悪のときを経ようとしてつづいてあります。五百万人以上の人々が飢餓に直面し、無用の戦争で多くの罪の無い人々が命を落としています。かつて六十年前、日本もまた、戦争で、国土が廃墟となりました。二百万の兵士と、百万人の市民が死に、アジアの近隣諸国にはそれ以上の惨禍をもたらしました。私も、生まれた直後の様子を良く覚えています。外国人はいつでも逃げる事ができます。しかし、この廃墟と化した土地にしがみついて生きなければならぬアフガン人は、どこにも逃げ場所がありません。であればこそ、私たちPMSは、変わらずに事業を継続して、皆さんと苦楽を共に致したいと思ひます。それがまた、伊藤くんへの追悼であり、過去の戦争で死んだ人々の鎮魂であります。皆さんの協力と要望がある限り、PMSの活動を止むことなく継続することを誓い、弔辞と致します。

二〇〇八年九月九日

アフガニスタン・シェイワにて
ペシャワール会現地代表・中村 哲

(葬儀は、現地時間午前九時からシェイワに建設中のマドラツサ敷地内に約八〇〇人が集まり開かれ、各村の有力者が弔辞を読み上げ、祈りを捧げました。村人との結束はより深くなりました)
PMSはペシャワール会医療サービス

世界に蔓延する暴力主義に 立ち向かうペシャワール会を グリーンコープは支援します



収穫したサツマイモを抱える子ども(撮影 伊藤さん)



アフガニスタンでペシャワール会の伊藤和也さんが武装グループの凶弾に倒れた、という事件の衝撃はグリーンコープの中にも駆け巡りました。「何よりも生命が大切にされる世界を築くため」に、アフガニスタンで活動をしてきたペシャワール会のスタッフが何故生命を落とさなければならないのか。ペシャワール会関係者と同じような怒りと悲しみを抱きました。また、当時の報道からは伝わってこない真実があることも察することができました。

今回の事件を受けて、改めてペシャワール会の活動とグリーンコープのこれまでの取り組みを追ってみることにします。



試験農場を訪れた農業指導員(左端が伊藤さん)

シャワール会は、1984年からパキスタン北西辺境州・ペシャワールを拠点に医療活動を開始。これまでペシャワールの病院とアフガニスタンの山岳地帯で3つの診療所を運営すると同時に、千ばつに見舞われたアフガニスタンの村々で「いのちの水」を確保するための井戸掘りや用水路建設などの水利事業を行ってきました。

グリーンコープは、「現地の人々の望むことを、現

千ばつ時の診療所周囲のようす
大地は枯れ果てた水路修復後の診療所周囲
緑が蘇った

世界を震撼させた9・11同時多発テロ。それによって、アフガニスタンはアメリカをはじめとする国々からテロ支援国家に指定され、空爆そして経済制裁を受けました。その頃、世紀の自然災害とも言える大干ばつがアフガニスタンを襲っていたのです。2000年春からアフガニスタンは人類が経験したことのないような大干ばつに多くの人の生命が危機に瀕していました。主要都市に押し寄せた難民、そして難民にもなれない貧しい人々が村に残されました。このような状況では、酷暑の冬は乗り越えられないだろう。そんな崩壊寸前の国に容赦もなく爆弾が落とされたのです。

2001年ペシャワール会から、大干ばつによる飢

饉とアメリカの空爆の戦火に苦しむアフガニスタンの人々への緊急支援「いのちの基金」への呼びかけがありました。グリーンコープは早速、ペシャワール会事務局長福元満治さんを講師に「アフガニスタン緊急支援集会」を開催し、カンパ活動に取り組みました。集まったカンパ金は2000万円を超えました。そのうち約1920万円をペシャワール会に、残りはアメリカのテロ被災者に赤十字をとおして届けました。併せて、ブッシュ大統領に「空爆をやめてください。暴力には暴力、戦争には戦争、という連鎖を今こそ断ち切らねばと考えます」という要請文を送りました。

多くの人が寄せられた「いのちの基金」によって、主食の小麦粉と油といった最小限の緊急支援物資が届けられ、30万人の生命が救われました。

緑の大地計画。 自給自足の農村再生へ 向けて

かつては豊かな農村だったところが砂漠化していく

大きな原因は、地球温暖化です。アフガニスタンは山岳地帯が大部分で、ヒンズークシュ山脈の雪や氷河からもたらされる水が豊かな大地を育んできました。しかし、温暖化の影響で山の雪は消え、大地は干されていったのです。ペシャワール会では、井戸掘りや用水路だけでは十分な水を確保することができないと考え、クナール川14kmにわたって大きな水路を引く「緑の大地計画」に着手することになりました。

この壮大な計画を支援しようと、グリーンコープは2006年1月カンパ活動に取り組みました。それに先立ち、エリア2カ所(岡山市と福岡市)で中村哲医師を招き講演会を開催しました。中村医師から語られるアフガニスタンの人々のようすや現地で頑張っている日本人スタッフの話に、アフガニスタンをとおして世界を見ることができました。その際、同時に取り組んだパキスタン東北部地震(マグニチュード7・6)

用水路作り 日本の伝統工法の蛇籠を積んでいるところ
人の手で水路は作られていく

グリーンコープはこれからもペシャワール会に連帯していきます

医師でありながら、聴診器やメスの代わりにシヨベルカーのハンドルを握って井戸を掘ってきた中村医師。今回の事件では憤りと悲しみを力に変えて、世界に蔓延する暴力主義に立ち向かうことを新たに決意されているようすが伺えます。そして、伊藤さんの遺功を引き継いでいくためにも、困難を乗り越えてペシャワール会の活動を継続するという強い意向も表明されています。

グリーンコープはこれからも中村哲医師をはじめ、ペシャワール会に連帯し、アフガニスタンの人々を支援していきます。